くらしは文化 no.75

山口県下関市

旧秋田商会ビル

経済・交通の要衝、下関に建つ事務所兼住居の斬新な近代建築

山口県下関市の旧秋田商会ビルは大正4（1915）年竣工。当時の最新技術で建設された、現存日本最古級の鉄筋コンクリート（RC）造の事務所で、洋館内に和風の住居や接客用大広間、屋上には和風庭園と離れ座敷をもつ斬新な造りである。下関市指定有形文化財。

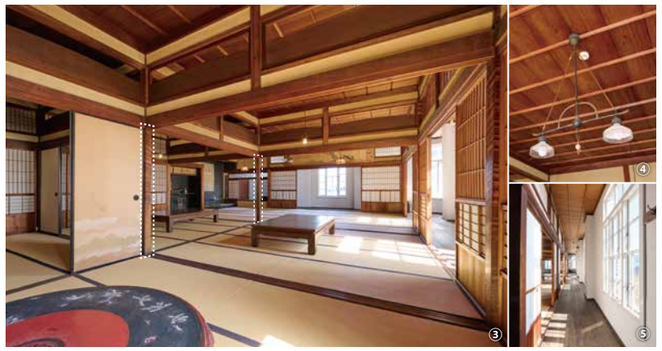
ドームを頂く塔屋が目を引く旧秋田商会ビル。当時の最新技術だった鉄筋コンクリート造の洋館に事務所、和風の住居・接客空間を階別に配置するユニークなしつらえ。屋上に瓦葺きの離れ座敷と庭園の植栽が見える。

化粧タイルを貼った外壁。付け柱の柱頭とパラペットにセセッション風の幾何学模様がある。

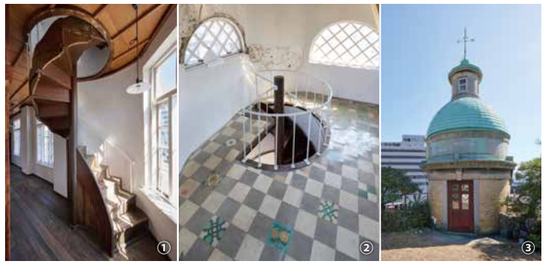
敷地東側に防火壁、2・3階の窓に防火扉を備えていたために太平洋戦争時、類焼を免れた。

1階事務所は洋風の造作。梁と4本の独立柱はC・I形鋼と鉄筋コンクリートで造られている。柱の持ち送りは、上の鉄骨を支える部材を装飾的にしたもの。

①事務所内にある植物の意匠で飾られたアメリカ製時計。②事務所と2、3階の居住空間を結ぶ階段には鉄柵が設けてある。



③書院造の3階大広間。可動式の柱2本と敷居を外すと6間続き、52畳になる。④上げ下げ可能な照明。下げて手元明かりにした。⑤RC造の壁との間に廊下が通る。外窓は和室の目線に合わせ低い位置から開口。



①屋上へ上がる木製の螺旋（らせん）階段。宮大工だった棟梁が手がけた。②タイル張りの塔屋内の床。③塔屋の上に明かりを灯し、自社船が関門海峡を航行する際の目印とした。

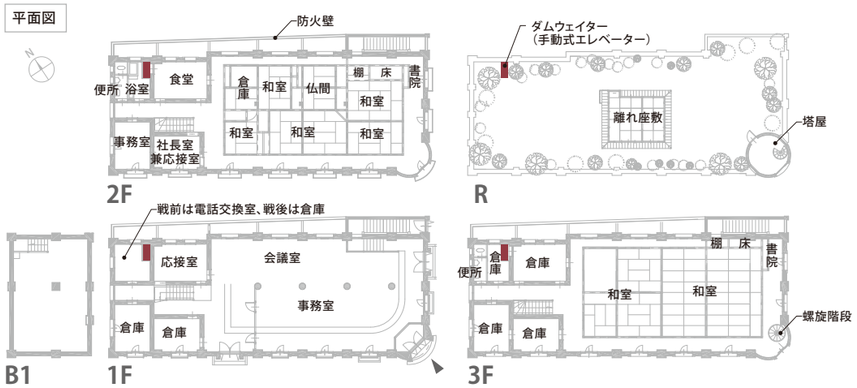
④陸屋根に土を敷き、松などを植えて造った庭園と離れ座敷。⑤半間の床が付いた離れ座敷。⑥滑車を使った手動式エレベーター。来客の食事を階下から運んだ。

下関は九州や韓国などとの航路の拠点で、旅客や物流の集積地として繁栄。明治後期～大正期には企業が先進技術を取り入れた事務所を建設して特有のまち並みを形成した。海運や貿易を手がけた秋田商会もその一つである。

旧秋田商会ビルは、当時、珍しかったタイルを外壁にあしらい、隅切りした南西隅にドームを頂いた塔屋を建てる洋風の外観。大正初期は明治期に多くみられたレンガ造から新工法のRC造への過渡期だったため、下関ではまだレンガ併用の建物も建てられていたが、当ビルはRC造3階建で一部に鉄骨も使用している。館内は1階に洋風の事務所、2、3階に住居や書院造の接客用大広間などの和室をしつらえる和洋折衷様式。和室はRC造に挿入された木箱のような納まりで、天井裏にRC造の梁、畳の下にコンクリートスラブがある。歴史的に、和室は徐々に洋館内に採用されるが、上階に積み重ねる配置は当時、斬新だったとされる。長年不詳だった設計者は2020年に発見された棟札から、関東都督府で技手を務めた西澤忠三郎と判明。RC造の工法や、外壁の柱頭・パラペットの装飾にセセッションの影響があることなど、西澤が関東都督府在任中にヨーロッパの知識を得た可能性が考えられるという。また、屋上に日本で最古級の和風庭園と、瓦葺きの離れ座敷を設けているのも特筆すべき点である。離れ座敷の完成も竣工後の早い時期と推測され、研究が続く。

当主の秋田寅之介は進取の気性に富む人物で、建物の構造はもとより、屋上庭園に続く螺旋階段や防火扉、食事を運び上げる手動式エレベーターの導入などにもその気質が表れている。大正期の最新技術と独創的なアイデアで建てられた近代建築は100年余を経た今も受け継がれ、観光施設として活用されている。

平面図



用語説明

【セセッション】19世紀末、オーストリアのウィーンにおこり、ドイツ、オーストリアの各地に広がった芸術革新運動。

【関東都督府】日露戦争後の1906年、旅順（中国遼寧省大連市の一地区）に設置された関東州統治機関。

【関東州】1905～1945年まで、中国の遼東半島にあった日本の租借地。

山口県下関市南部町23-11
協力：下関市

くらしは文化バックナンバー